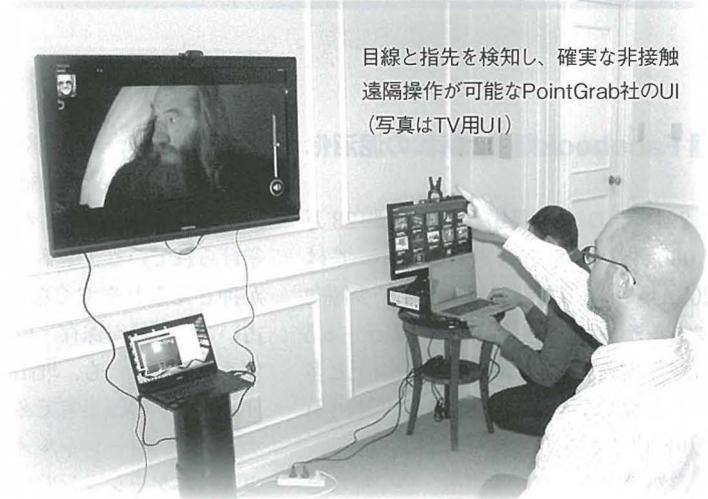


## イスラエルから参戦 PointGrab社

コンピュータビジョン活用した  
確実性あるジェスチャー操作

CEATEC JAPAN2014開催期間中、イスラエルからやって来たPointGrab社から編集部経由で取材の招待を受けた。しかも本会場にブースを出展したわけではなく、幕張のホテルの一室で個別デモを見せてくれるという、メディア狙い撃ちの直球勝負。コンピュータビジョン（いわゆる「ロボットの目」）を専門に扱うという同社が開発した斬新かつ便利なUIの数々とは。



目線と指先を検知し、確実な非接触遠隔操作が可能なPointGrab社のUI（写真はTV用UI）

**最**初に紹介されたのは、スマホ搭載カメラでの自分撮り用アプリ「Come me」。レンズに対して特定のジェスチャーを行うことで、任意のタイミングでシャッターを切らせることができる。

モバイルワールドでスマホ向け最新テクノロジー賞を受賞し、これまでに400万DLを記録しているなど人気のアプリだけあって、完成度が高い。コンピュータビジョンを専門、という同社の開発力を知る意味でもわかりやすいアプリと言える。

続いて「PointTouch」。離れた位置からタブレット端末、PCなどのディスプレイを操作できるシステムで、右目と指先という2ポイントを別のカメラで感知することで操作の確実性を高めている。

この派生形とも言える「PointSwitch」は照明やカーテン・ブラインドなどを指先で遠隔操作する仕組み。さすがにホテル一室でのデモはなかったが、PCやタブレットを離れた位置から操作する場面がさほどない（映像系サービス利用時くらい）ことを考慮すると、あるいはこちらのほうが本命かもしれない。

映像系では別途、テレビをジェスチャー操作できる仕組みを用意していた（名称は特になくのこと）。面白いのは、ジェスチャーが直感的であること。口の前に指を1本立てた「シー」のポーズを取ると、音声がMUTEになるというのはなかなかユニークだ。

また、先の「PointTouch」などと同様に目線

をチェイスしているため、ユーザの視線が実際にテレビを見ているかどうかを端末側が検知できそうだ。放送局などがその情報を回収できれば、本当の意味での視聴率を含めた視聴動向ビッグデータが構築できるかもしれない。

検知対象者は事前に登録されるため、カメラ側で「家族の誰が見ているのか」も判断できる。これもビッグデータ構築にあたっては有力な情報となり得るが、とりあえず現状、これらシステムが特定サーバにつながって情報を吸い上げる、という仕組みにはなっていないようだ。

## ジェスチャーでも高い確実性

いずれもカメラによる画像認識をメインとした技術を活用した形であり、特に「Come me」以外の各種システムの方向性はマイクロソフトの「Kinect」に近いものがある。

大きな違いは「値段」。説明してくれた担当者によれば、デモに用いた「PointTouch」は非タッチ対応の100ドル程度のパネルと5ドル程度のカメラで構成されているそうで、担当者自身も「我々の優れた技術を示す指標のひとつ」と胸を張る。

また実際に体験してみると、指先・目線の二段構えにしている点も効果的だ。印象論にはなるが、的は極めて外しにくく、狙ったポイントを一発で引き当てることができていた。非接触の遠隔操作においてこうした確実性は第一歩であると同時に最重要課題であり、それをクリアできている点は大きい。

Kinectとの違いで言えば、音声操作を取り入れていない点も特徴と言える。これは「そもそも違うテクノロジー」（担当者）であることが最大の理由だろうが、だからこそ得意分野であるコンピュータビジョンの確実性に磨きがかかっているとも言える。

難点は取り立てて見当たらないが、こうしたジェスチャー系の場合、接触操作や従来の専用リモコンと比べてどこに優位性を見出していくのか、が鍵となるだろう。確かに便利ではあるが、旧来のアナログ操作から全面的に切り替わっていくほどの波を起こすのはなかなか難しい。

本体そのものが持つマシンラーニング、あるいはビッグデータ活用によるアルゴリズム強化といった「更なる操作性向上」に加え、これぞ未来型、次世代型というインパクト、とどめの一撃がほしいところだ。

